

鹿児島高専 正員 村田秀一 正員 ○岡林巧

1. まえがき 集中豪雨時の斜面前壊は、雨水から斜面内への浸透流量の程度によって大きく異なる。雨水からの浸透流のある斜面前壊については、従来より多くの研究がなされていて、その機構が複雑である故に理地的防災に適用され難いものが多い。降雨下における斜面前壊の主要因としては、間隙空気圧、間隙水圧の増加、サクションの低下および貯留水の起因する力学定数の遮断などが考えられる。本研究は、降雨下における火山灰中の不飽和鉛直流動機構を人工降雨実験を実施し、主として降雨下での斜面の浸透能特性および間隙圧特性に着目して考察したものである。

2. 実験方法と試料の性質 実験装置は図-1のような内径110mm、長さ1430mmのアクリル円筒を用いた。降雨強度は40~100mm/hの範囲で任意に設定でき、降雨の状態はノズルと金網により28~1.0mmφの混合雨となるよう工夫している。また、雨水浸透とともに間隙空気圧、間隙水圧はそれぞれゲッケンゲン式差圧計およびひずみゲージ式間隙水圧計により測定した。さらに表面流出水量および浸透流出水量はオーバーフロー式用器を用いた。実験条件は表-1に示すところである。試料は桜島産火山灰砂の4.76mm以下のもので、指標的性質を表-2に示す。

3. 実験結果および考察 降雨下における火山灰斜面の崩壊特性を人工降雨実験により求めたものが図-2である。いずれの降雨強度においても終局的崩壊が発生する前に表面流出水を認めたものであるが、この表面流出発生時に降雨強度が斜面の最終浸透能を超えていたものと考えることができる。したがって、斜面前壊の解釈には降雨に対する斜面の浸透特性を加味して検討が必要である。図-3は円筒側面浸透深度D、積算浸透深度Iおよび浸入度Iと降雨時間との関係を示す。

表-1 実験条件

したのである。Dは面取扱紙上で直線的関係にあるので、次のインテグラートの基本式が成立つ。

$$D = C t^n \quad (C, n: \text{定数})$$

$$I = \frac{dD}{dt} = C n t^{n-1}$$

表-2 試料の指標的性質

図-3に示して実測式から、浸入度は、降雨とともに急速に増加するが、その後は急速に低減することができる。

初期含水比 (%)	初期湿潤密度 (KN/m³)	初期乾燥密度 (KN/m³)	比重	初期間隙比	初期間隙率 (%)
1.0	14.578	14.433	2.64	0.794	44.3

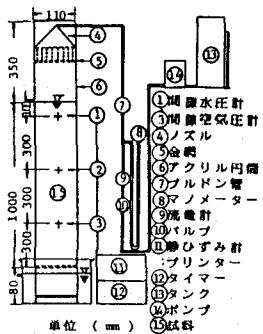


図-1 実験装置

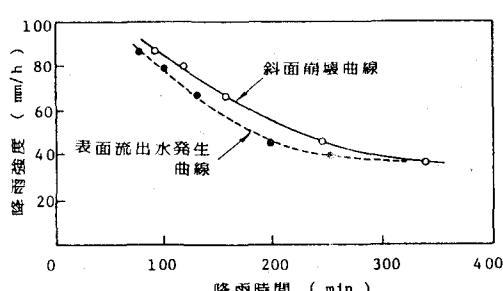


図-2 降雨強度と斜面の崩壊特性

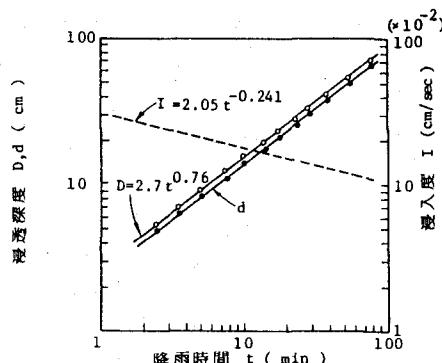


図-3 雨水の浸透特性

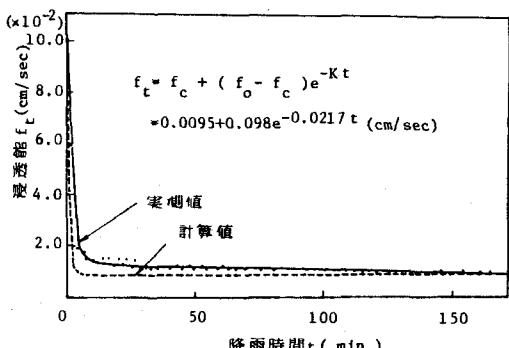


図-4 漫透能曲線

HORTON, R.E. (1940) 地盤中に水が浸入する速度を漫透能として表わして、これに基づいて漫透能曲線を示したもののが図-4である。図より降雨開始後10分で最終漫透能の約85%まで達していることがわかる。これは降雨強度が 82 mm/h と非常に大きい理由によるものと考えられる。図-5は前述の漫透能方程式中の定数Kを定めるために、各時間の漫透能と最終漫透能との差である有効漫透能と降雨時間の関係を示したものである。図-4中の破線はHortonの漫透能曲線である。実測値との差が降雨初期に特に著しいが、これは降雨初期での音響的精度と本式の適用範囲を考慮する必要がある。表面流出強度と降雨時間の関係を示すものが図-6である。ここで、表面流出強度 = 降雨強度 - 浸透能 - 地表面貯留強度として表面流出強度を算定した。図より判るようすに実測値の表面流出強度がHorton式によつて場合に比べて大きくなっているのは、前述した音響的精度と式の適用範囲の問題に加えて、地表面貯留強度の算定をいかににするかが今後の問題となる。図-7は、間隙水圧と降雨時間の関係を示したものである。前述の図-3に示した雨水の漫透深度dと比較して判るようすに、試料上部の間隙水圧の降雨とともに下部挙動は漫透前線の到達と共に正圧を受け、通過にいたがって負圧をわずかに呈し、漫透終了後に漸次正圧を示す傾向にある。一方、試料下部のもとでは、漫透前線の通過と共に負圧を受け漫透終了後同様に正圧を示している。また、最終的に間隙水圧は深度が大きい箇所ほど大きな正圧値に定常にする傾向が認められる。前者の挙動は雨水の火山灰中の不飽和流動に起因しているものと考えられる。深度 200 mm の③に設置して間隙空気圧と降雨時間の関係を示したもののが図-8である。間隙空気圧は漫透前線の到達まで約 $0\sim2 \text{ mm AL}$ の幅で振動し、通過と共に急上昇を呈している。この降雨初期の挙動は雨水の流動とともに下部間隙空気と雨水の交換時に発生する圧力の増減によるものと考えられる。また、漫透終了後の間隙空気圧の減少は、漫透水の底部排水による負圧発生に主因しているものと考えられる。

謝辞：本研究を進めるにあたり、親切な御指導をいただいた川大工学部山内豊郎教授、有益な御助言をいただいた鹿児島大学農学部河原田謙次郎教授はじめ川大工学部後藤見之輔助教員に深謝の意を表する。又、本実験を実施するにあたり、手本土木学科基礎工学研究室学生、若水まさき、田舎寺政浩、松田俊二、実験測定の協力を受けた。ことに感謝の意を表す。なお、本研究は文部省科学研究費補助金(昭和36年)の助成を受けたことを付記する。

参考文献：(1) 不則男：雨水漫透：土壤全面簡便法について、第6回土壤工学研究会発表、pp.105-109。(1961)

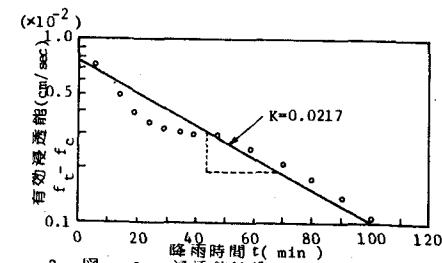


図-5 降雨時間と漫透能特性

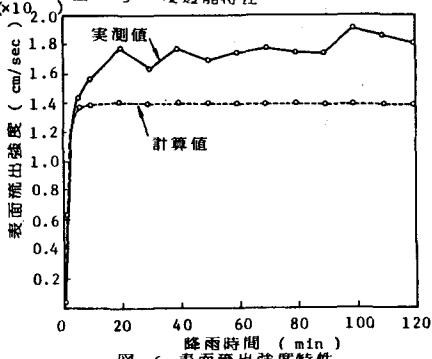


図-6 表面流出強度特性

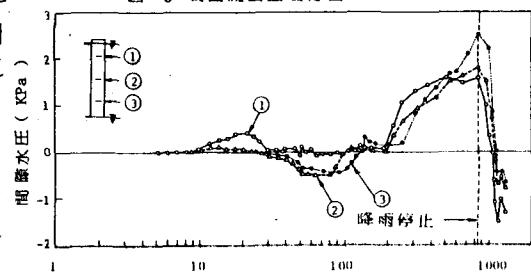


図-7 間隙水圧と降雨時間の関係

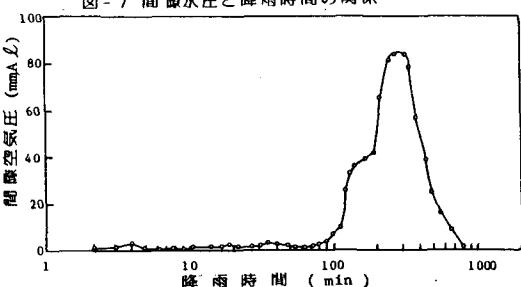


図-8 間隙空気圧と降雨時間の関係